

「ぼくの良ところ」は、いつも元気なところだ」「私は優しい性格です」。自分の長所を一人ずつ発表する子どもたち。発表ごとに他の児童が大きな拍手を送る。9月中旬、鳴門教育大学が徳島県阿南市の平島小学校4年で行った予防教育の一コマだ。

いじめや暴力、うつ病、肥満といった子どもたちを取り巻く問題は、すべて心の問題から発生しているというのが予防教育の考え方だ。同大の予防教育は、「自律性」と「対人関係性」の育成を大目標とする包括的なプログラムで、いじめや生活習慣改善など特定の問題に絞った「オプショナル教育」も用意している。



No. 1690 教育ルネサンス いじめと向き合う 14

「心の基盤作り」で予防



予防教育の授業で、自分の良さを発表する子どもたち（9月12日、徳島県阿南市の平島小で）

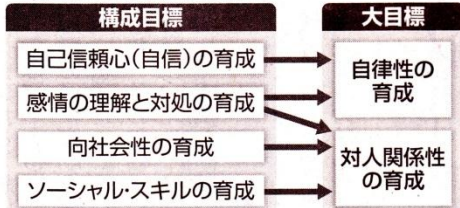
し、子どもたちの集中を途切れさせない。付箋に自分の良いところを書いて黒板に貼り、友だちに質問してもらいなど、手も頭も動かす。「感情をかき立てることで、

知識の定着を図っている」。開発した同大予防教育科学センターの山崎勝之所長(57)は胸を張る。この日、2時間分行われた授業の前半のテーマは「自分の長所を探す」、後半は「友だちの長所を探す」。

担当した同センター研究補佐員の安田小響さん(27)は「児童の目が輝いており、メッセージが心に届いたと思う」と山崎所長に感じた様子だ。

同大の予防教育は小3から中1まで計160時間の授業で構成する大規模なものだ。今年度、同県内の公立小15校で試行的に始まり、平島小では3、4、6年生で8時間ずつ行う計画となっている。「3年後には徳島県下で広く定着させ、その後、国内外に広げていきたい」と山崎所長は意気込む。

鳴門教育大の予防教育



・構成目標ごとに8時間、小3~中1の5年間で計160時間のプログラムとなっている

山崎所長によると、いじめっ子の心の状態は、家庭環境が大きく影響している。幼児期に空腹などの生理的欲求を親から「うるさい」などと抑え込まれたり、攻撃的行動で目的を達成する親の姿を見たりすると、他人が困る姿を喜ぶ心理が働く。勉強中心になりがちな学校で、心の育成にどこまで本気で取り組めるかが問われている。(木村達矢、写真も)

よようになる。

「いじめ問題を直接考えさせる授業は速効性があるのは確か」と山崎所長。だが、加害者の心は根本では変わっていないため、しばらくたつと再びいじめは起こる。いじめ撲滅には、長期で地道な「心の基盤作り」が必要、というのが山崎所長の考えだ。